

春日部福音自由教会 2020年6月21日 11:00 同時配信礼拝

聖書 旧約聖書 詩篇 56 篇 1 節～13 節

説教 「主イエスに望みを置く」 山田豊協力牧師

おはようございます。ともにこの会堂に集い、また時を同じくして礼拝の配信を共有して神様に礼拝を捧げられることを心より感謝いたします。お祈りをお捧げいたします。

憐れみ深い天の父なる神様。世界中が立ち騒ぐ中であってしばらくの時、静まって一時を過ごせますことに感謝をいたします。このような形で、少しずつ共に集う礼拝のために準備をしてくれている兄妹姉妹の労にどうぞ報いてください。主にある諸教会は様々な仕方で礼拝を捧げております。キリスト者もまた共に協力しあい地域にある教会としての営みが求められております。この町の人達、また私たちの国のあちらこちらでも、苦しみを共有しながら解放への道を進んでおります。分断と混乱ではなく、平和への道を歩むことができますように、特に医療関係の方々、その機関の働きが守られますようにお祈りをいたします。今朝も主の御言葉が開かれております。しばらくの時、この場所で、またそれぞれのところで、主の御言葉に聞き入ることができますように。主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。

はじめに

今年の3月、イエス様のお導きで、ある方の葬儀の司式をいたしました。召された方は当教会の方ではないのですけれども、三代目のクリスチャンの姉妹です。この方のおじい様は生まれてわずか8ヶ月でお父さんを亡くされました。自伝によりますとコレラに感染したことが原因であったと書いてありました。下田に停泊中の黒船を見に行っただけでコレラに感染したのです。安政5年、今から160年も昔の話であります。以後この方のお母様は乳飲み子を含む7人の子供たちを女手一つで育て上げました。その中でこのくだんのおじい様は青年時代に教会に導かれイエス・キリストを信じ、生きる希望を見出したというのです。そして自分の事業を展開しながら教会の伝道の働きを担い、後にキリスト教歴史大事典に名が収められるようになりました。土屋捨吉という方です。その方の出自を読みながら、今のこの時代と重なるものがありました。大きな病のゆえに肉親を失い、今も深い悲しみや痛みの中にいるという方がおられるわけです。私達も含め今この時代で苦しんでいる者がこの捨吉さんのように救いの望みをイエス・キリストにおいて少しでも前に向かって歩むことができたなら、なんと幸いなこと

ではないかな、そのために教会の営みもあるのだろうな、と思わされた次第です。

詩篇 56 篇

本日の御言葉に皆さんとともに心を向けて参りましょう。詩篇の 56 篇です。「指揮者のために」とありますから、礼拝における聖歌隊の賛美に使われた詩篇だと思われます。ミクタムという言葉は、詩篇の中で意味がはっきり分からない言葉のひとつだということです。「贖う」という意味がある、そうしたところから、「罪を贖うこと、贖い」と解釈する向きもあるようです。また黄金の詩とも言われているそうです。

はじめに 1 節 2 節、5 節 6 節を見て頂きたいのですが、ここにはこの詩篇の作者であるダビデの苦しみ描かれています。5 節 6 節をお読みします。「1 日中彼らは私のことばを痛めつけています。彼らの思い計る事はみな、私に災いを加えることです。彼らは襲い、彼らは待ち伏せ、私のあとをつけています。私の命を狙っているように。」一体ダビデに何が起きていたんでしょうか。それは表題に書かれておりますけれども、ペリシテ人がガテでダビデを捕えたという出来事があるわけです。実際の物語はサムエル記の第一、21 章に書かれております。若きダビデは当時イスラエルと敵対していたペリシテ人、そのペリシテ人の大男ゴリアテを打ち倒しまして名を挙げて、サウロ王に召し抱えられることとなりました。王子であるヨナタンとは深い友情で結ばれておりました。

けれども戦場においてダビデが戦果をあげればあげるほど、サウロは嫉妬の故でしょうか、ダビデの命を狙うようになり、ついにヨナタンとの仲も裂かれてしまいます。彼の許を逃げ出したダビデは以後サウロが戦死するまで、逃亡の生活を強いられるようになります。で、ここではあろうことか、サウロの許を逃げ出したダビデは敵地であるペリシテ人の地、しかもゴリアテの故郷であるガテという所に逃げ込んだわけです。ここまではサウロは追ってこないだろうと思ったのかもしれませんが。地図で見ますとガテという町はエルサレムのやや南、ペリシテ人は地中海に面したところに住んでおりましたけれどもその東寄り、見た目では地図上では、イスラエルの地図の左下の方にある町です。捕えられたダビデは自分の身が悟られないように、よだれを垂らし、壁に自分の体を打ち付けて狂人のように振る舞ったわけです。時の王アキシュも、どうしてこんなやつを連れてくるのか、怒るわけでありましてけれども、アキシュ王の目を欺くことに成功し、身分を知られないで済んだのです。敵地にいていつも命の危険と隣り合わせにいな

がら逃亡の生活を送っていたわけです。

ダビデの人生は一体どういう人生だったのか。イスラエル国家の礎を築いた偉大な王ではありましたが、別々の言い方をすれば逃げて逃げて、逃げまくった人生を送った人です。サウロ王に追われ、敵に追われ、王になってからは息子のアブシャロムにも命を狙われるような人でした。1節 2節 5節 6節に描かれている苦しみというのは、このようなことが背景になっています。他のいくつかの詩篇にも逃亡生活のことが背景となって歌が歌われております。

皆さんの中にもひょっとすると何かに追われている方がいるかもしれません。さすがに、命をつけ狙われているんだという方はおられないと思いますけれども、借金取りに追われているとか、お仕事をしている方であれば仕事の期限や納期に追われているだとか、学生であればレポート・宿題の提出に追われているということがあられるかもしれません。尤も今はオンライン授業というものが行われていて、学校の先生がオンラインのための録画の準備であるとか教材の準備であるとか、先生の方が今追われているかもしれません。なかなかご苦労があるかと思えます。けれどもこのような目に見えることのほかに、精神的にあるいは気持ち的に追い詰められてどうにも逃げる場所がない、それほど苦しんでおられる方もいらっしゃるかもしれません。

このサムエル記第一 21 章以降を読みますと、ダビデの逃避行の生活が描かれています。それはきっと私達の兄妹姉妹方の苦しみの生活と重なることがあるでしょう。その物語を読む時に、追い詰められ苦しんでるのは自分だけでなく、ダビデも同じだったんだな、そういったことに気づかされると思います。ではダビデはそのような苦しみの中でどのようにしてそこから脱出することができたのでしょうか、神様により頼むことができたのでしょうか。実際の出来事は今申しましたように第一サムエル記の 21 章以降を読んでいただくと事の次第が分かります。苦しみの中に神を崇め、その神様を信頼する者となっていく物語が描かれております。

3 節から 11 節、少し飛びながらですがけれども御言葉をお読み致します。4 節に、「神にあって私はみことばをほめたたえます。私は神に信頼し、何も恐れません。肉なるものが私に何を成し得ましょう。」8 節には、「あなたは私のさすらいをしるしておられます。どうか私の涙をあなたの皮袋に蓄えてください。それはあなたの書にはないのでしょうか。」そして 10 節に、「神にあって私は御言葉をほめたたえます。主にあって私は

みことばをほめたたえます」と詠われています。8節にはこのダビデの「受けた苦しみを神の皮袋に蓄えてください」と訴えています。そして神様の書に私の苦しみが記されていないはずがないと詠います。これは「自分の苦しみを神様、あなたはしっかりと覚えていてくださるんです、覚えていてください」という願いに他なりません。

私達は自分の受けた苦しみを忘れたいと思います。思い出せば辛いので記憶から消し去りたい、その方が楽になると思うからです。けれどもこの辛いことを忘れないで思い起こすことは、新しいあなたに変えられていくために必要なことなんですね。神様はあなたの涙をご自分の皮袋に蓄え、しっかりとその辛さを覚えてくださっています。まことに寄り添ってくださっているわけです。時々神様の皮袋を開けて、あるいは神様の書を紐解いて自分自身のつらかったことを思い起こすことは、自らを前に進ませるひとつのきっかけになることでしょう。

詩編の56篇に何回か出てくる言葉は、“信頼”という言葉と、“ことば”という言葉です。ちょっとややこしいですが、“信頼”という言葉と、“ことば”という言葉です。神様への信頼というのは神の言葉を信じて行動することに他ならないわけです。私達に当てはめれば神様を信じて生きるっていう事は、この書かれた御言葉、聖書、これを信じて進むということに他ならないわけです。そういう意味でこの言葉がとても大事なのです。ところがですね、皆さんお気づきのように今のこの時代、言葉が失われているんです。言葉がなくなってるんです。新しい生活様式の中では対面で話すのではなくて、こう、同じ方向を向いて話すようにとか、距離を置いて話すようにとか言われてますよね。我が家はいま、家内と二人の生活ですけれども、ちょっと大きめのテーブルに今までは対面で座ってたんですけど、最近はずれて、端っことうしに座って距離を取って過ごしております。

この礼拝でも以前のように聖歌隊の賛美がある。心から賛美歌を全部の節を通して歌うということができない、やめているという現状があるわけです。小学校のホームページを見ましたならば音楽の授業でNGなのはみんなと一緒に歌うこと、と書いてありました。ですから器楽演奏であるとかそういうことをしている、今はこういう時代になってしまったのかと思いました。老人ホームに入られている方がお食事の時は食堂に集まるわけです。でもなかなか十分な距離を空けて座ることができないので食事の時はできるだけ喋らないように、そう言われたそうです。ただでさえ気持ちが落ち込んでるのに、そんなこと言われても本当に気持ちが滅入ってしまうんです、と言われていました。禅寺や修道院で修行としては、沈黙を守りながら食事をするということはあろうかと思

ますけれども、日常生活ではやはり楽しく会話をしながら、お食事をしたりともにある、ということが当たり前のことであると思います。

そんな中で、励まそうっていうことで春日部の親善大使の方が春日部市民にメッセージを、インターネット上ですけども寄せています。新潟県人頑張れっていうメッセージもあったので大変びっくりいたしました。お国の言葉でお国の出身者を励まそうということなんでしょうね。

確かに言葉と言っても例えば E メールであるとかそういうようなものによる通信よりも、やはりお互いに合って顔を見ながら会話をしたり手書きのお手紙の方が心に届くということがあるわけですね。言葉というのは単に文字であったりあるいは音声であるということではなく、そこにきっとその人格、人となりというものが現れるからだと思います。感情と言うか、何かしらの思いがついて来るわけです。ですからテキストだけではなく絵文字をつけたりスタンプを合わせて送ったりするわけです。

私達が言葉を信じるというのは、その言葉を発した人を信じるということです。たとえ沈黙であってもその人の存在を感じることができれば大丈夫です。まさに **Sounds of Silence** (サウンズ・オブ・サイレンス) です。逆にどんなにたくさんの言葉があっても心に何も感じる事がなければその人を信頼する、その人に任せようという気持ちにはならないでしょう。人々の心にも残る言葉というのがとても大きなものになるわけです。

ダビデを追い詰める敵はダビデの人格とも言える彼の言葉を潰そうとしていたわけです。それが 5 節に書いてあります。けれども今お読みしました 11 節までの中でダビデは神を信頼し御言葉をほめ称えているわけです。幸いなことに私たちは御言葉、神の言葉である聖書、これが手元にあるんです。何よりも御言葉はイエス様そのものですね。それが今年度の年間聖句、年間賛美になっているわけです。

「はじめに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。」聖書を読む、覚える、心に蓄える、ということは、私たちがイエス様と一つになるということでもあるわけです。ときに理解することを難しい御言葉もあろうかと思います。イエス様はこう仰いました。「わたしのもとに来て自分の父、母、妻、子、兄妹、姉妹、その上自分の命までも憎まない者はわたしの弟子になることができません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者はわたしの弟子になることはできません。」イエス様の弟子となる道のひとつです。文字通り親を捨て十字架の横木を背負っていることが、イエス様

の弟子となるということでしょうか。家族の反対を押し切って家を出て神学校に行き牧師になった方も確かにおられます。しかしこの御言葉が語ってることは親兄弟のこと、そして自分自身のことすら放棄する思いで神様におゆだねする時に神様があなたを守り、親を守り、兄弟を守り、愛の中に入れてくださって最善の道を導いてくださるということです。だから神に信頼してあなたは示された道を歩んで私についてきなさいと語っているわけです。

イエス様は一体どんなお心なんだろう、キリストの心はどのようなことがこの御言葉に表されているのだろう、そういう思いで私達も御言葉に聞いて参りたいと思います。私達のすぐ近くに御言葉があります。でもどうしてその御言葉に心を寄せるのではなく、色々な事柄に耳や心や時間も奪われて騒ぎ立ってしまうのでしょうか。何かに追い立てられ、私たちの心が抗っている時こそ静まって神の言葉に思いを向けるべきです。それでまず御言葉を心に留めることがとても大切なことであるわけですね。一箇所御言葉を引用いたします。「キリストの言葉をあなたがたの内に豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい」(コロサイ 3:16)。神様のお言葉を心に蓄える日々を今週も送らせていただきたいと思います。

さて最後の部分、12節 13節に目をとめてみましょう。「神よ、あなたへの誓いは私の上にあります。私は感謝のいけにえをあなたに捧げます。あなたは私の命を死から、まことに私の足をつまずきから救い出してくださいました。それは私が命の光のうちに神の御前を歩むためでした。」ダビデの命を付け狙う人の追跡は執拗でした。ガテで何とか難を逃れたダビデではではありませんでしたが、彼の逃避行はまだ続きます。ダビデはそのような生涯を思い起こして自分を守ってくださった神様に、感謝のいけにえを捧げているのです。祭儀として動物あるいは穀物を捧げたことでしょうか。また賛美の歌を捧げたことでしょうか。何よりも詩篇の 51 篇にありますように、ダビデは砕かれた悔いた心を神様にお捧げしたわけです。

捧げものについて

今日このような形の礼拝の時に普段の礼拝と違うのは献金、この捧げものもまさに私達の信仰の表れですけれども、以前と同じようにはなかなか出来ませんね。でもこの点においても聖書を見ますと、この初代の教会の人たちがどのようにしていたのかヒン

トがあります。第一コリントの 16 章の 2 節、この御言葉の後半に、「あなた方はそれぞれいつも週の初めの日に収入に応じていくらかでも手元に蓄えておきなさい」。それぞれの生活の中で捧げ物のためにそれを取り分けておいた、すなわち聖別しておいた、ということが初代教会の営みの一つとして記されています。私達もそのような生活に習いたいわけです。私たちが捧げる礼拝というのは、全身全霊、私達の全てを主にお捧げし、また目に見える形でそのことを表す礼拝であるはずで、神の守りを感謝したダビデは自らを主に捧げているのであります。

むすび

説教のむすびとして、もう一度この詩篇の 56 篇の表題に戻っていただきたいと思えます。詩篇表題をもう一度ご覧ください。ここに“遠くの人のももの言わぬ鳩の調べに合わせて”、と書いてあります。なんとも不思議な表現です。この“もの言わぬ鳩”というのは一体何であるのか。今朝ここに来る前に丘の上のロビーでしばし静まっておりましたら、鳩が飛んできました、山鳩でしょうか、ウデーポッポーと鳴いていました。ああ、この鳩は鳴いている、と思ったわけですがけれども、なんとなく鳩の鳴き声ってちょっと物寂しげな気が致しました。この詩篇の 56 篇は、“もの言わぬ鳩”と書いてあります。参考書には故郷を遠く離れているユダヤ人の寂しさ、あるいは聖所礼拝する場所から遠く離された人々を表す表現である、とありました。それはまさに今の私達のこのような礼拝の営みと重なるなあと思いました。集いたくても集うことはできない。そのような今の時代と重なっているように感じたんですね。ちなみにヘブル語の鳩というのはヨナという言葉で、このヨナという語根はぶどう酒って言うんですね。現代のユダヤ人はこの表現をどのように理解してるのかなと思ったりいたしました。皆さんにとっていかがでしょうか。もの言わぬ鳩のしらべ、どんなしらべであったのか、具体的に分かりませんがけれどもやはり何かしら寂しさを感じさせます。声が出なくなったほどの辛い、声を出すことができないほどの辛い経験を表しているのでしょうか。どうしたらこの鳩はものを言うように、歌うように、鳴くようになるのでしょうか。

かつての文部省唱歌に“歌を忘れたカナリヤ”って歌がありました。「歌を忘れたカナリヤは裏の山に捨てちゃうんですか、柳の枝で作った鞭でぶつんですか、いえいえそれはなりません」というんですね。「象牙の船に乗せて海に浮かべたらおのずと思ひ出すだろう」って詠われてます。八木重吉の詩に“素朴な琴”という詩があります。短い詩です。こういう詩なんです。「このあかるさのなかへ ひとつの素朴な琴をおけば 秋

の美しさに耐えかねて 琴はしづかに鳴りいだすだらう」。私の好きな詩のひとつです。秋の日差しの中に琴をおけば自然となり出すってんです。私達もこの苦しみの中で自由に会話することができない。自分の言葉が失われている。周りの人に追い詰められて追い詰められて、自分の言ったことが否定されてしまうような、そんな生活かもしれない。まさにもの言わぬ鳩のような状況である。でもそんな私達を憐れみ深い神様は、私の許に来なさい、私の中にあなた自身を置きなさい、と言ってくださっています。そうするとき心に蓄えた御言葉があなたを活かす言葉として湧き上がってくるのですね。ダビデのように御言葉をほめたたえる者となる、と神様は今朝語っておられます。神の言葉、御言葉こそイエス様ご自身であって、私達を生かすお方です。この方に望みを置いて、新しい週、私共の旅路をそれぞれのところで、また共に歩いてまいりましょう。

最後の祈り

お祈りをお捧げいたします。

恵み深い天の父なる神様。今朝もあなたの御言葉を中心に集い、しばらくの時、御言葉に聞くことができ感謝をいたします。何が大切なのか、逃亡の先で身を隠していたダビデはあなたの懐こそが隠れ場であり、休息の場であることを見出し、やがて力を得て立ち上がることができました。私どももあなたの許に身を寄せ、御言葉を信じて新しい日々を歩むことができますように。たとえ今いるところから出られないような苦しみがあっても、あなたの許にいることを覚えさせてください。そして御言葉が泉となって湧き出る、そんな経験をすることができますように。主イエスキリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン